

## 未就学児と新型コロナウイルス感染症(COVID-19)に関する国内の報告

### のご紹介

2020年11月11日に東京小児科医会 HP でご紹介した、「東京都港区内の保育施設で COVID-19 の濃厚接触者と判断された職員および通園児に対する疫学的調査について」が論文化されました。(小児科臨床 2021.1月号 74巻1号 P37-40)

限られたエリアの調査ではありますが、感染の真っ只中にある港区で、保健所、病院、開業医が連携した報告として評価されています。

また、発熱を中心とするかぜ症状で外来受診したお子さんの新型コロナウイルス陽性率などについても報告がありましたので併せてご紹介します。

「東京都港区内の小児における新型コロナウイルス濃厚接触者および非濃厚接触者それぞれの新型コロナウイルス(SARS-CoV-2)検査陽性率の検討」

(小児科臨床 2021.1月号 74巻1号 P33-36)

<http://shoni-iji.com/paper/paper74/paper-74-1.html>

日本の小児は COVID-19 には罹患しにくく、重症化もしにくいことが一般的な考え方になりつつありますが、無症状例や、軽症例のお子さんがどの程度の感染力を持つのか、外来の発熱小児にどの程度の頻度で COVID-19 がいるかは不明でした。

今回の2つの報告により港区という限定した地域ではありますが、保育施設を中心とした幼児の集団生活では、保育者側が通常の感染予防策を十分行えば、比較的感染リスクは低く、さらには家庭内感染での感染率も低いことが示されました。また発熱外来とも言える小児科外来の立場からは、COVID-19 のスタッフへの感染リスクは少ないものと考えられました。現在の第3波の最中の最近の状況でも報告内容と全く変わらないとのことでした。

COVID-19 についてはさまざまな報告がありますが、いまだ未解明なことも多いようです。また、コロナウイルスは短期間のうちに変異しやすい性格を持つことが知られ、感染伝播の状況等も刻々と変化することが想定されます。このたびは限られた症例数ではありますが、現在私どもが得た情報を報告することで、COVID-19 の解明と対応に少しでも寄与することができればと考え、HP に掲載したことをご了承ください。

また今回の報告に対して長崎大学小児科森内浩幸教授から、次のようなコメントを頂きましたので、ご紹介いたします。

「多くの子ども達を診ておられる小児科外来診療の現場、そして様々な感染症が流行する保育施設において、日本の子ども達における SARS-CoV-2 感染の実態を明らかにした論文が出たことは、大変意義があることだと思います。

子どもにとっては SARS-CoV-2 感染は無症候性または軽症が殆どで、RS ウイルスやインフルエンザなどと比べるとずっと軽い感染症です。もちろん数多くの子ども達が感染すると、中には重症化するケースもありますが、それは他のかぜのウイルスでも同じです。基礎疾患を持っていたり、遺伝的にウイルス感染防御機構に不備があったりすれば、ただのかぜでも命に危険を及ぼすことがあります。

また今回の論文でも示されましたように、子ども達の間でそんなにこのウイルスは広がって行きません。もちろんこれだけ社会の中での流行が拡大すれば、家庭の中にウイルスが持ち込まれて子どもにも感染し、その子どもが保育施設や学校に持ち込むこともあるでしょう。それでも、保育施設や学校におけるクラスターの発生は、全体から見るとごく一部に過ぎません。大袈裟に取り上げて、不必要に子ども達の生活に制限を加えることがあってはなりません。

そして、大人達の行動半径にある場所(職場、飲食店、通勤電車などなど)と比べれば、小児科診療の現場は SARS-CoV-2 感染のリスクが相対的に見てむしろ低い場所です。未だ小児科クリニックにおけるクラスターの発生は報告されていません。保護者の方々が COVID-19 を過剰に心配し、子ども達にとって重要な予防接種や乳幼児健診を取り止めてしまったり、子どもの気になる心身のトラブルが見つかって受診を控えてしまったりすれば、子ども達の健康に大きなトラブルが生じることになります。是非、子どもの心身の健康の増進・保持のために、これまで通りかかりつけ医の先生方に診てもらおうよう啓発しなければなりません。

「今後も現場からこのような報告が出されて、正しく怖がり正しく行動することに繋がればと希望します。」